広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 六朝楽府訳注（二十三）：「折楊柳」二首・関山月」四首 |
| Author(s) | 小川, 恒男 |
| Citation | 中國中世文學研究 , 71 : 78 - 95 |
| Issue Date | 2018-03-25 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047684 |
| Right | |
| Relation | |

# 六朝楽府訳注（二十三）―「折楊柳」二首・「関山月」四首―

小川恒男

## はしがき

本稿にはまず陳の王瑳と江総の「折楊柳」をそれぞれ一首ずつ収めた。いずれも陳後主の「狎客」に数えられ、後世から何かと非難の対象となった詩人である。江総の「折楊柳」に見える「倡園」の語は、六朝詩中では他に陳後主の「折楊柳」にしか使われていないことから、奉和の作である可能性があるだろう。

ついで『楽府詩集』巻二十三に移り、「関山月」を四首。梁の元帝が一首、陳の後主が二首、陸瓊が一首である。『楽府解題』に「離別を傷むなり。」とあるように、作品の最後の二句で離別の哀しみに触れてはいるけれども、詩人の狙いはむしろ北辺の月を描写することにあるように感じられる。恐らくは自分の耳目で見聞した光景ではなく、あくまでも文献的な知識に基づき想像によって再構成された光景である。その意味では「折楊柳」も事情を同じくし、それぞれが「詠関山月」「詠楊柳」といった詠物詩のような性格を帯びている。斉梁期から陳代に作られた楽府詩や詠物詩の多くが、所与の詩題による詩作活動という点で共通しているためだと思う。詩人たちは作品の主題、題材が予め定められている中で、どのような言葉を用いて表現するかに意を注ぎ、腕を競ったのだろう。それらの様々な試みは、あるものは次の唐詩に受け継がれ、あるものは宋詞に至って再発見されるのだが、やはり多くの試みが試みに留まってしまったもののように見受けられる。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『楽府詩集』（中華書局　一九七九）である。

## 陳・王瑳「折楊柳」

【本文及び書き下し】

1 塞外無春色　塞外　春色無く
2 上林柳已黄　上林　柳　已に黄なり
3 枝影侵宮暗　枝影　宮の暗きを侵し
4 葉彩乱星光　葉彩　星の光るを乱す
5 陌頭蔵戲鳥　陌頭　戲鳥を蔵し
6 楼上掩新妝　楼上　新妝を掩ふ
7 攀折思為贈　攀折して贈を為さんと思ふも
8 心期別路長　心期　別路　長し

【日本語訳】

1 塞外の地には春の気配はないでしょうけれど
2 ここ上林苑では柳がもう黄色く芽を吹きそうです
3 柳の枝のシルエットが宮殿の薄暗い所に入り込み
4 葉の姿が空の星の輝きを乱しています
5 道の傍らでは柳が飛び回る鳥の姿を隠し
6 高殿の上では化粧したばかりの私を覆い隠します
7 枝を手折ってプレゼントにしようと思いましたが
8 別れたあなたがいらっしゃる所までの道は長く伸びているのです

【校勘】

○『文苑英華』巻二百八・『古詩紀』巻百十六
3「宮」、『詩紀』作「雲」、而注云「一作『営』」。

【押韻】

「黄」「光」、下平十一唐韻。「妝」「長」、下平十陽韻。陽・唐同用。

【作者】

生没年未詳。陳の文人。陳の後主の時、官は散騎常侍に至る。江総、孔範等とともに狎客の一人に数えられ、『南史』恩倖列伝には「刻薄貪鄙、忌害才能」と評される。陳が滅びると隋の文帝よって僻遠の地に追放された。現存する詩は三首。

【語釈】

**1 塞外無春色　2 上林柳已黄**

［塞外］国境地帯。『漢書』武帝紀に「遣因杅将軍公孫敖築塞外受降城。（因杅将軍公孫敖を遣はし塞外に受降城を築かしむ。）」。また、漢・李陵「答蘇武書」（『文選』巻四十一）に「涼秋九月、塞外草衰。（涼秋　九月、塞外　草　衰ふ。）」とある。梁・呉均「辺城将」詩四首其一に「塞外何紛紛、胡騎欲成群（塞外　何ぞ紛紛たる、胡騎　群を成さんと欲す）」と。詩では梁以前には見当たらないようである。

［無春色］春のうららかな眺めを見ることができない。「春色」は春の景色。斉・謝朓「和徐都曹」詩（『文選』巻三十。本集作「和徐都曹出新亭渚」。）に「宛洛佳遨遊、春色満皇州（宛洛　遨遊するに佳く、春色　皇州に満つ）」とある。また、梁・武陵王蕭紀「明君詞」（『文苑英華』巻二百四作「昭君怨」。『古詩紀』巻八十一注云「一作『昭君辞』」。）に「塞外無春色、辺城有風霜（塞外に春色無く、辺城に風霜有り）」（「風」、『英華』作「夙」。）と同一句が見える。

［上林］天子の庭園の名。秦の始皇帝の時に造られ、漢の武帝の時に拡張された。ここは名を借りて都の周辺をいうだけだが、六朝詩、特に梁代以降によく見られ

る。『三輔黄図』苑囿に「漢上林苑、即秦之旧苑也。『漢書』云、『武帝建元三年、開上林苑。東南至藍田・宜春・鼎湖・御宿・昆吾。旁南山而西、至長楊五柞。北繞黄山、瀕渭水而東。周袤三百里、離宮七十所、皆容千乗万騎。(漢の上林苑は、即ち秦の旧苑なり。『漢書』に、『武帝の建元三年、上林苑を開く。東南は藍田・宜春・鼎湖・御宿・昆吾に至る。南山に旁ひて西し、長楊・五柞に至る。北は黄山を繞り、渭水よりして東に瀕す。周袤　三百里、離宮　七十所、皆な千乗万騎を容る』と云ふ。)」と見える。『漢書』は揚雄伝上に似た文章が見える。梁・簡文帝蕭綱「春日想上林」詩に「春風本自奇、楊柳最相宜。柳条恒著地、楊花好上衣(春風本自り奇に、楊柳　最も相ひ宜し。柳条　恒に地に著き、楊花　好く衣に上る)」と。

[柳已黄]柳がもうそろそろ芽吹きそうだ。梁・何遜「辺城思」詩に「柳黄未吐葉、水緑半含苔(柳　黄にして　未だ葉を吐かず、水　緑にして　半ば苔を含む)」とある。

**3 枝影侵宮暗　4 葉彩乱星光**

[枝影侵宮]柳の枝のシルエットが宮殿内の薄闇に勝手に入り込む。梁・邵陵王蕭綸「見姫人」詩に「却扇承枝影、舒衫受落花(却扇　枝影を承け、舒衫　落花を受く)」とあり、梁・元帝蕭繹「和鮑常侍龍川館」詩に「桂影侵檐進、藤枝繞檻長(桂影　檐を侵して進み、藤枝　檻を繞りて長し)」と。

[葉彩]柳の葉の姿。六朝詩では他の用例は見当たらない。

[乱星光]こちらも六朝詩では他の用例は見当たらない。「星光」の語は陳・沈烱「従駕送軍」詩に「星光下結旆、剣気上舒精(星光　下りて旆に結び、剣気　上りて精を舒ぶ)」とある。

**5 陌頭蔵戯鳥　6 楼上掩新妝**

[陌頭]道の傍ら。梁・沈約「臨高台」に「所思曖何在、洛陽南陌頭(思ふ所　曖として何くに在る、洛陽　南陌の頭)」とある。

[蔵戯鳥]柳が飛び回る鳥の姿を隠す。「戯鳥」は遊ぶように気ままに飛ぶ鳥。斉・王融「後園作回文」詩に「花余払戯鳥、樹密隠鳴蟬(花　余りて　戯鳥を払ひ、樹密にして　鳴蟬を隠す)」とあり、梁・陸罩「採菱曲」に「戯鳥波中蕩、游魚菱下出(戯鳥　波中に蕩き、游魚　菱下より出づ)」とある。

[楼上]高い建物の上。多く閨怨詩に現れ、「待つ女性」の居場所をいう。「古詩十九首」(『文選』巻二十九)其二に「青青河畔草、鬱鬱園中柳。盈盈楼上女、皎皎当窓牖(青青たる河畔の草、鬱鬱たる園中の柳。盈盈たる楼上の女、皎皎として窓牖に当たる)」と「柳」とともに描かれる。

[掩新妝]お化粧したばかりの女性を柳が覆い隠す。「新妝」の語は陳・陸瑜「東飛伯労歌」に「新妝年幾纔三五、隠幔蔵羞臨網戸(新妝　年幾　纔かに三五、幔に隠れ羞ぢらひを蔵めて網戸に臨む)」と見える。

**7 攀折思為贈　8 心期別路長**

[攀折]枝に手をかけて手折る。漢・淮南王劉安「招隠士」(『楚辞』)に「攀援桂枝兮聊淹留。(桂枝を攀援して聊か淹留す。)」とあり、会うことが難しい人物を描写するのに用いられる。「古詩十九首」(『文選』巻二十九)其九には「攀条折其栄、将以遺所思(条に攀がけて其の栄を折り、将に以て思ふ所に遺らんとす)」と会うことのできない恋人に花をプレゼントしたいと詠う。梁・簡文帝蕭綱「折楊柳」にも「楊柳乱成糸、攀折上春時(楊柳　乱れて糸を成し、攀折す　上春の時)」とあった。

[為贈]プレゼントにする。梁・劉令嫺「摘同心支子、贈謝娘因附此詩」(『玉台』巻十)に「両葉雖為贈、交情永未因(両葉　贈を為すと雖も、交情　永く未だ因あらず)」と見える。

[心期]心の友。また思い人。王雲路『六朝詩歌語詞研究』(黒龍江教育出版社　一九九九)に「『心期』謂朋友・知己。『心期』本謂心中思念、心中想法。『梁詩』巻六沈約『贈劉南郡季連』、『宴游忽永、心期靡悔』。又転指思念的対象、即友人・親朋。(『心期』は朋友・知己のことである。『心期』はもともと心の中の思い、心中の考えのことである。『梁詩』巻六の沈約『贈劉南郡季連』に、『宴游　忽ち永く、心期　悔ゆる靡し』とある。また転じて思う対象、即ち友人・親戚を指す。」とある。ここは詩意から恋人、または夫を指すと解した。

[別路]別れた人との間の道が長く伸びている。梁・柳惲「贈呉均」詩三首其一に「心知別路長、誰謂若燕楚(心に知る　別路の長きを、誰か謂ふ　燕楚の若しと)」とある。

### 陳・江総「折楊柳」

【本文及び書き下し】

1 万里音塵絶　万里　音塵　絶え
2 千条楊柳結　千条　楊柳　結ぶ
3 不悟倡園花　悟らず　倡園の花の
4 遥同天嶺雪　遥かに天嶺の雪と同じきを
5 春心自浩蕩　春心　自ら浩蕩として
6 春樹聊攀折　春樹　聊か攀折す
7 共此依依情　此の依依たる情を共にするも
8 無奈年年別　奈ともする無し　年年の別れ

【日本語訳】

1 辺境の地に行ったままのあの人からは音沙汰もなく
2 千筋もの柳の枝が風に舞って絡み合っています
3 気が付きませんでした、妓女の私がいる庭の柳の糸が

4遠く離れた天に届くほど高い山々の雪と同じように白いとは
5あなたを慕う春らしい思いは遠くあなたにまで届きそうです
6春になって伸びた柳の枝をちょっと手折ってみましょう
7柳の枝のしなやかさから浮かぶ、側にいたいという気持ちはきっとお互い様なのでしょうけど
8別れの哀しみが年ごとに繰り返されるばかりで、どうしようもありません

【校勘】
○『文苑英華』巻二百八・『古詩紀』巻百十四・『漢魏六朝百三名家集』「江令君集」
1「塵」、『英華』作「信」。
3「悟」、『英華』作「誤」、注云「一作『悟』」。
4「天嶺」、『英華』作「故里」、注云「一作『天嶺』」。『詩紀』『百三名家集』並作「羌嶺」、『詩紀』注云「一作『天嶺』」。

【押韻】
「絶」「雪」「折」「別」、入声十七薛韻。「結」、入声十六屑韻。屑・薛同用。

【作者】

五一九～五九四。六朝後期の文人。梁・陳・隋に仕えた。字は総持。済陽郡考城（河南省蘭考県）の人。名門に生まれ、十八歳で武陵王蕭紀の法曹参軍として初めて出仕した。後、梁の武帝にその詩才を高く評価された。太清二（五四八）年、徐陵とともに東魏への使者に択ばれたが、病気を理由に辞退した。間もなく侯景の乱が起こり都建康が陥落すると、江総は会稽へ、さらに嶺南へと難を避け、以後十数年を広州で過ごした。陳の天嘉四（五六三）年、文帝により中書侍郎として召還され、文帝、宣帝に仕えた。五八三年、後主が即位すると江総はその信任を得て高官を歴任し、至徳四（五八六）年には尚書令（宰相）となった。江総は宰相の位にあっても政治に関与せず、後主と日夜酒宴を張り詩文を作って楽しむばかりで、陳後主の「狎客」とされ、亡国の一因となったことを批判される。禎明三（五八九）年、隋が陳を滅ぼすと、隋に仕え上開府となり、開皇十四（五九一）年に卒した。

江総は亡国の臣としてその政治姿勢を非難されることが多いが、宮廷詩人として活躍し、艶麗な作風が大いにもてはやされた。一方、熱心な仏教信者であったため、山中の仏寺を訪れた際の作品をいくつか残しており、そこには優れた山水描写が見られる。今、百首あまりが伝わる。

【語釈】



**1万里音塵絶　2千条楊柳結**

［万里］長い道のり。漢・李陵「歌」（『漢書』蘇武伝）に「径万里兮度沙漠、為君将兮奮匈奴（万里を径りて沙漠を度り、君が将と為りて匈奴に奮ふ）」と見えるようにしばしば辺塞の地を指す。

［音塵］消息。「音信」に同じ。宋・謝荘「月賦」（『文選』巻十三）に「歌曰、『美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月』。（歌に曰く、『美人　邁きて　音塵　闕ゆ、千里を隔てて　明月を共にす』と。）」とあり、李善注は晋・陸機「思帰賦」に「絶音塵於江介、託影響乎洛湄。（音塵を江介に絶ち、影響を洛湄に託す。）」とあるのを引く。

［千条］千すじもの枝。梁・蕭子顯「春別」詩四首（『玉台』巻九）其一に「翻鶯度燕双比翼、楊柳千条共一色（翻鶯　度燕　双比翼、楊柳　千条　共に一色）」と。

［楊柳結］柳の枝が絡み合う。『芸文類聚』巻八十八に引く『六韜』に「冬氷可折、夏条可結。（冬氷も折るべく、夏条も結ぶべし。）」とある。また、梁・沈約「奉和竟陵王薬名」詩に「木蘭露易飲、射干枝可結（木蘭　露飲み易く、射干　枝　結ぶべし）」と。

**3不悟倡園花　4遥同天嶺雪**

［不悟］気が付かなかった。思いもしなかった。三国魏・嵇康「与阮徳如」詩に「不悟卒永離、念隔増憂歎（悟らず　卒かに永離して、隔てらるるを念へば憂歎増すを）」と。

［倡園花］妓女のいる庭園植えてある柳の綿毛。「倡園」の語が陳・後主宝叔「折楊柳」二首其一に「楊柳動春情、倡園妾屧驚（楊柳　春情を動かし、倡園　妾　屧しば驚く）」と見える以外に六朝詩には他の用例が見当たらないことから、江総の「折楊柳」が奉和の作であると考えられる。

［遥同］遠く離れた～によく似ている。梁・簡文帝蕭綱「七励」に「遥同暮雨、逼似朝霞。（遥かに暮雨と同じく、逼りて朝霞に似る。）」と。

［天嶺］天に届くほど高い山々。晋・張協「游仙」詩に「崢嶸玄圃深、嵯峨天嶺峭（崢嶸として　玄圃　深く、嵯峨として　天嶺　峭し）」と。

［～花、～雪］花の城里行きの白さを対比する表現には梁・范雲「別詩」の「昔去雪如花、今来花似雪（昔去るに　雪　花の如く、今　来たれば　花　雪に似る）」などがある。

**5春心自浩蕩　6春樹聊攀折**

［春心］春の眺めに触発される思い。多くの場合、男女の情愛をいう。『楚辞』招魂（宋玉）に「目極千里兮傷春心、魂兮帰来哀江南（目　千里を極めて春心を傷ましめ、魂　帰り来たり江南を哀しむ）」とあり、梁武帝蕭衍「子夜四時歌」春歌四首（『玉台』巻十）其一に「春心一如此、情来不可限（春心　一に此くの如く、情

来たって限るべからず)」とある。右に引いた陳後主「折楊柳」には「春情」の語が見えた。また、斉・江朝請奐(『謝宣城集』巻二作「江朝請」、『楽府詩集』巻五十九作「江奐」)「緑水曲」に「春心既易蕩、春流豈難越(春心　既に蕩き易く、春流　豈に越え難からんや)」と見える。

[浩蕩] 畳韻。思いがはてしなく広がる。『楚辞』九歌・河伯に「登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩(崑崙に登りて四望すれば、心　飛揚して浩蕩たり)」とある。

[春樹] 春を迎え生命力に溢れた樹木。梁・沈約「会圃臨春風」詩(『玉台』巻九作「臨春風」。)に「臨春風、春風起春樹(春風に臨み、春風　春樹に起こる)」と。

[攀折] 枝に手をかけて手折る。陳後主「折楊柳」二首其二に「聊持暫攀折、空足憶中園(聊か持して　暫く攀折すれば、空しく中園を憶ふに足る)」と「聊」とともに用いられていた。

**7共此依依情　8無奈年年別**

[共～情] あなたと思いを共有したい。斉・謝朓「奉和随王殿下」詩十六首其十四に「想折中園草、共知千里情(折らんことを想ふ　中園の草、共に知る　千里の情)」と。

[此依依情] この柳の枝のしなやかな様と遠く離れた所にいるあなたへの思い。「依依」、枝のしなやかな様。『詩経』小雅・采薇に「昔我往矣、楊柳依依(昔　我往く、楊柳　依依たり)」とあり、陳・徐陵「折楊柳」にも「嫋嫋河堤樹、依依魏主営(嫋嫋たり　河堤の樹、依依たり　魏主の営)」とあった。また、人を慕って離れがたい様。漢・蘇武「詩」四首(『文選』巻二十九)其二に「胡馬失其群、思心常依依(胡馬　其の群を失ひ、思心　常に依依たり)」と。「此～情」という表現は魏文帝曹丕「於玄武陂作」詩に「忘憂共容与、暢此千秋情(憂ひを忘れて共に容与とし、此の千秋の情を暢ばさん)」と見える。

[無奈] どうしようもない。梁・朱超「賦得蕩子行未帰」詩に「無奈園中柳、寒時已報人(無奈園中柳、寒時已報人)」と。

[年年別] 別れたままの哀しみが毎年繰り返される。梁・范雲「范広州宅聯句」に「洛陽城東西、却作経年別(洛陽　城の東西、却って経年の別れを作す)」と。「年年」は毎年。晋・陶淵明「擬古」詩九首其六に「年年見霜雪、誰謂不知時(年年　霜雪を見る、誰か謂ふ　時を知らずと)」と。

## 梁・元帝「関山月」

【本文及び書き下し】

1 朝望清波道　朝に望む　清波の道
2 夜上白登台　夜に上る　白登の台
3 月中含桂樹　月中　桂樹を含み
4 流影自徘徊　流影　自ら徘徊す



5 寒沙逐風起　寒沙　風を逐ひて起ち
6 春花犯雪開　春花　雪を犯して開く
7 夜長無与晤　夜は長けれども　与に晤ふ無く
8 衣単誰為裁　衣は単へなるも　誰か為に裁たん

【日本語訳】

1 朝には清波への道を遠く眺め
2 夜には白登の物見台に上った
3 月はモクセイの影をひそめていて
4 月の光が水の流れのように辺りをうろついている
5 冷たい砂が風に吹かれて舞い上がり
6 春の花が降り積もった雪の間から顔を出している
7 夜は長いのにともに語り合う人もいない
8 衣は単衣なのに誰も私のために服を仕立ててくれない

【校勘】

○『芸文類聚』巻四十二・『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻八十・『漢魏六朝百三名家集』「梁元帝集」

0 「関山月」、『詩紀』注云「一作『傷別離』」。
1 「清」、『英華』『百三家集』並作「青」、而『英華』注云「一作『清』」。
3 「含」、『英華』『百三家集』並作「有」、而『英華』注云「一作『含』」。
4 「影」、『英華』『百三家集』並作「景」、而『英華』注云「一作『影』」。
6 「犯」、『英華』『百三家集』並作「向」、而『英華』注云「一作『犯』」。

【押韻】

「台」「開」「裁」、上平十六咍韻。「徊」、上平十五灰韻。灰・咍同用。

【作者】

五〇八～五五四。梁の第三代皇帝(在位五五二～五五四)。武帝(蕭衍)の第七子、昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱の異母弟。湘東王に封ぜられ、江陵に鎮して重きをなし、簡文帝を擁する侯景に対抗した。外からは西魏の侵攻を受け、王室内部の抗争もあって、在位二年あまりで没した。『金楼子』六巻をはじめとする多くの著作がある知識人であり、詩作もよくした。

【語釈】

**0関山月**

[関山月]『楽府詩集』巻二十三題解に、

『楽府解題』曰、「『関山月』、傷離別也。古『木蘭詩』曰、『万里赴戎機、関山度若飛。朔気伝金柝、寒光照鉄衣』。按、相和曲有『度関山』、亦類此也。

『楽府解題』に曰く、「『関山月』、離別を傷むなり。古『木蘭詩』に曰く、『万里　戎機に赴き、関山度ること飛ぶが若し。朔気　金柝を伝へ、寒光

鉄衣を照らす』と。按ずるに、相和曲に『度関山』有り、亦た此れに類するなり。

とある。「関山」は重要な関所のある険しい山々。張煜『楽府詩題名研究』(北京大学出版社　二〇一三)は「関山、山名。在寧夏回族自治区南部。有大関山、小関山。大関山為六盤山高峰、小関山平行於六盤山之東、南延為崆峒山。(関山は山名。寧夏回族自治区の南部にある。大関山、小関山がある。大関山は六盤山の高峰で、小関山は六盤山の東に平行しており、南に延びて崆峒山となる。)」とする。

**1朝望清波道　2夜上白登台**

[朝望]朝には遠くから眺める。宋・鮑照「和王丞」詩に「夜聴横石波、朝望宿巌煙(夜には聴く　石に横たふの波、朝には望む　巌に宿るの煙)」と。

[清波]「青波」とも。地名。『史記』黥布列伝に「章邯之滅陳勝、破呂臣軍、布乃引兵北撃秦左右校、破之清波、引兵而東。(章邯の陳勝を滅ぼし、呂臣の軍を破るや、布　乃ち兵を引き北して秦の左右校を撃ち、之れを清波に破り、兵を引きて東す。)」と見え、『漢書』は「青波」に作る。「青波」は陳勝伝にも見え、『補注』は沈欽韓の「青波即青陂也。」との説を引く。「青陂」は『水経注』淮水に「淮水、……、又東、青陂水注之、分青陂東瀆、東南逕白亭西。(淮水、……、又た東し、青陂水　之れに注ぎ、青陂・東瀆を分かち、東南して白亭の西を逕(ふ)。)」と見える。河南省駐馬店市新蔡県。

[白登台]白登山にあった台。山西省大同市。匈奴の冒頓単于が漢の高祖劉邦を七日間にわたって包囲したところ。『史記』高祖本紀に「会天寒、士卒堕指者什二三、遂至平城。匈奴囲我平城七日、而後罷去。(会たま天寒く、士卒　指を堕とす者　什に二三、遂に平城に至る。匈奴　我を平城に囲むこと七日、而る後　罷めて去る。)」とあり、『正義』に「『括地志』云、『朔州定襄県、本漢平城県。県東北三十里有白登山、山上有台、名曰白登台。(『括地志』に云ふ、『朔州定襄県、本漢の平城県。県の東北三十里に白登山有り、山上に台有り、名づけて曰白登台と曰ふ』と。)」とある。

**3月中含桂樹　4流影自徘徊**

[月中含桂樹]月にモクセイの影がひそんでいる。月に桂樹が生えているという伝説は古く、例えば『御覧』巻九百五十七に引く『淮南子』に「月中有桂樹。」とあり、この句とよく似ている。元帝「芳樹」には「桂影含秋月、桃花染春源(桂影　秋月を含み、桃色　春源を染む)」と見える。

[流影]川の流れのような月の光。橘英範氏が「液体の月光―中国古典詩における月光表現管見―」(「中国中世文学研究」第44号　二〇〇三)で液体として表現される月の光について詳細な調査結果を示している。この句は三国魏・曹植「七哀詩」(『文選』巻三十三。『玉



台』巻二作「雑詩」。)「明月照高楼、流光正徘徊(明月　高楼を照らし、流光　正に徘徊す)」を踏まえると思われる。

[徘徊]畳韻。うろつく。また立ち去りがたい様。斉・王融「臨高台」に「還看雲棟影、含月共徘徊(還た看る　雲棟の影の、月を含みて　共に徘徊するを)」と。

**5寒沙逐風起　6春花犯雪開**

[寒沙]秋や冬の冷たい砂漠。梁・范雲「效古」詩(『文選』巻三十一)に「寒沙四面平、飛雪千里驚(寒沙四面　平らかにして、飛雪　千里　驚く)」とある。また、沈約「昭君辞」(『玉台』巻五。『英華』巻二百四作「昭君怨」。『楽府詩集』巻二十九作「明君詞」)に「日見奔沙起、稍覚転蓬多(日び見る　奔沙の起こるを、稍(やや)く覚ゆ　転蓬の多きを)」と。

[逐風]追われるかのように風に吹かれる。晋・陶淵明「雑詩」十二首其一に「分散逐風転、此已非常身(分散して風に逐はれて転じ、此れ已に常の身に非ず)」と。元帝には「芳樹」に「落英逐風聚、軽香帯蘂翻(落英　風を逐ひて聚(あつ)まり、軽香　蘂(すい)を帯びて翻る)」、「巫山高」に「灘声下濺石、猿鳴上逐風(灘声(たんせい)　下りて石に濺(そそ)ぎ、猿鳴　上りて風を逐ふ)」、「洛陽道」に「青槐随幔払、緑柳逐風低(青槐(せいくわい)　幔(とばり)に随ひて払ひ、緑柳　風を逐ひて低(た)る)」、「緑柳」詩に「長条垂払地、軽花上逐風(長条　垂れて地を払ひ、軽花　上りて風を逐ふ)」、「賦得登山馬」詩に「汗赭疑沾勒、衣香不逐風(汗赭(かんしゃ)　勒(くつわ)を沾(うるほ)すかと疑ひ、衣香　風を逐はず)」とあるなど用例が多い。

[春花]春の花。最も美しく素晴らしい時節をイメージさせる。宋・鮑照「中興歌」十首其七に「九月秋水清、三月春花滋(九月　秋水　清く、三月　春花　滋(しげ)し)」とあり、梁・昭明太子蕭統「有所思」に「別前秋葉落、別後春花芳(別前には　秋葉　落ち、別後には　春花　芳し)」とある。

[犯雪]六朝詩では他の用例は見当たらない。「犯」は危険を顧みず強引にに侵入する。三国魏・応瑒「侍五官中郎将建章台集」詩(『文選』巻二十)に「遠行蒙霜雪、毛羽日摧頽(遠く行きて霜雪を蒙り、毛羽　日びに摧頽(さいたい)す)」とあり、李善注は「『東観漢記』曰、『世祖蒙犯霜雪』。(『東観漢記』に曰く、『世祖　霜雪を蒙犯す』と。)」という。

**7夜長無与晤　8衣単誰為裁**

[夜長]秋や冬の夜が長い。「古詩十九首」(『文選』巻二十九)其十七に「孟冬寒気至、北風何慘慄。愁多知夜長、仰観衆星列(孟冬　寒気　至り、北風　何ぞ慘慄(さんりつ)たる。愁ひ多くして　夜の長きを知り、仰いで衆星の列なるを観る)」と。

[無与晤]いっしょに語り合うことがない。晋・潘尼「贈陸機出為呉王郎中令」詩六章其六(『文選』巻二十四)

に「彼美陸生、可与晤言（彼の美なる陸生、与に晤言すべし）」とあり、李善注は『毛詩』曰、『彼美淑姫、可以晤言』。鄭玄曰、『晤、猶対也』。（『毛詩』に曰く、『彼の美なる淑姫、以て晤言すべし』と。鄭玄　曰く、『晤、猶の対のごときなり』と。）」と、『詩経』陳風・東門之池とその第一章「可与晤歌（与に晤歌すべし）」に対する鄭箋を引く。また、梁・劉孝綽「林下映月」詩には「茲林有夜坐、嘯歌無与晤（茲の林に夜坐する有るも、嘯歌　与に晤ふ無し）」とある。

［衣単］服に裏地がなく単衣だということ。魏文帝曹丕「善哉行」（『文選』巻二十七）に「上山采薇、薄暮苦飢（山に上りて薇を采るも、薄暮　飢ゑに苦しむ）」とあり、李善注に引く「古艶歌」に「居貧衣単薄、腸中常苦飢（居　貧しく　衣　単薄にして、腸中　常に飢ゑに苦しむ）」と見える。また、漢・無名氏「孤児行」古辞に「冬無複襦、夏無単衣（冬に複襦無く、夏に単衣無し）」と。

［誰為裁］私のために衣服を仕立ててくれる者はいない。「裁」は衣服を作るのに布を切ること。転じて衣服を仕立てる。後の例だが陳・李爽「山家閨怨」詩に「竹巾君自折、荷衣誰為裁（竹巾　君　自ら折り、荷衣誰か為に裁たん）」と。

## 陳・後主「関山月」二首其一

【本文及び書き下し】

1秋月上中天　秋月　中天に上り
2迴照関城前　迴かに関城の前を照らす
3暈欠随灰減　暈の欠くるは灰の減するに随ひ
4光満応珠円　光の満つるは珠の円かなるに応ず
5帯樹還添桂　樹を帯びて還た桂を添へ
6銜峰乍似弦　峰を銜みて乍に弦に似る
7復教征戍客　復た征戍の客をして
8長怨久連翩　長に久しく連翩たるを怨みしむ

【日本語訳】

1秋の月が大空高く上り
2遥か遠くから辺境の砦を照らしている
3月暈は蘆草の灰が描く円が欠けるのに随って欠け
4月光は秋の露が丸く結ぶのに応じて丸く満ちる
5月は林の木々を側に繞らせているだけでなくモクセイの樹を加え
6山の峰々を包み込むとちょうど半月のように見える
7さらには辺境の砦を守る兵士たちに
8守備の任務がいつまでも終わらないことをいつも不満に思わせるのだ

【校勘】

○『古詩紀』巻百八・『漢魏六朝百三名家集』「陳後主集」2「迴」、『詩紀』『百三家集』並注云「一作『廻』」。



【押韻】

「天」「前」「弦」、下平一先韻。「円」「翩」、下平二仙韻。先・仙同用。

【作者】

五五三～六〇四。字は元秀、呉興長城（浙江省湖州市）の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四（五八二）年、即位。禎明三（五八九）年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。

亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が楽府である。

【語釈】

**1秋月上中天　2迴照関城前**

［秋月］秋の空に浮かぶ月。多くの場合、明るい月として描かれる。宋・謝霊運「隣里相送方山」詩（『文選』巻二十）に「析析就衰林、皎皎明秋月（析析として衰林に就き、皎皎として　秋月明らかなり）」と。また、梁・武帝蕭衍「辺戍」詩（『玉台』巻十作「辺戎」。清・呉兆宜『玉台新詠箋注』云、「『戎』、一作『戍』」。）に「秋月出中天、遠近無偏異（秋月　中天に出で、遠近偏異無し）」と見える。

［中天］天空。宋・顔延之「応詔観北湖田収」詩（『文選』巻二十二）に「神行埒浮景、争光溢中天（神行は浮景と埒しく、争光は中天に溢る）」と。

［迴照］遠く離れた所から照らす。北周・庾信「傷往」詩二首其二に「還是臨窓月、今秋　迴かに松を照らす）」と。

［関城］辺境の砦。漢・枚乗「上書重諫呉王」（『文選』巻三十九）に「深壁高塁、副以関城、不如江淮之険。（壁を深くし塁を高くし、副ぬるに関城を以てするも、江淮の険に如かず。）」とある。

**3暈欠随灰減　4光満応珠円**

［暈欠］月の暈が欠ける。「暈」は月の周囲にうっすらと見える光。

［随灰減］月に照らされた窓の下に蘆草の灰で円形を描いてから一部を取り除くと、それに随って月の暈も欠ける。『淮南子』覧冥訓に「画随灰而月運闕。（画灰に随ひて　月運　闕く。）」とあり、高誘注に「将有軍事相囲守、則月運出也。以蘆草灰随牖下月光中、令圜画、欠其一面、則月運亦欠於上也。（将に軍事の相ひ囲守すること有らんとすれば、則ち月運　出づるなり。蘆草の灰を以て牖下・月光中に随ひ、圜画せしめ、其の一面を欠けば、則ち月運も亦た上を欠くなり。）」とある。「運」は「暈」に通じる。一句、戦争で敵に包囲されると月に暈が現れ、蘆の灰で円形を描いてその一

部を取り除くと、月の暈もそれに応じて欠け、敵の包囲も解けるという言い伝えによる。梁・庾肩吾「和望月」詩に「円随漢東蚌、暈逐淮南灰（円かなるは漢東の蚌に随ひ、暈は淮南の灰を逐ふ）」と見える。

［珠円］秋の露が丸い。梁・武帝蕭衍「遊鍾山大愛敬寺」詩に「落英分綺色、墜露散珠円（落英　綺色を分かち、墜露　珠円を散ず）」とあり、北周・庾信「奉和賜曹美人」（「曹」、『庾子山集』作「曾」。）詩に「月光如粉白、秋露似珠円（月光　粉の如く白く、秋露　珠に似て円かなり）」と見える。

**5帯樹還添桂　6銜峰乍似弦**

［帯樹］すぐ側に樹木をめぐらせている。梁・江淹「傷愛子賦」に「霧籠籠而帯樹、月蒼蒼而架林。（霧　籠籠として樹を帯び、月　蒼蒼として林に架く。）」と。

［添桂］梁・元帝「関山月」の第3句「月中含桂樹」【語釈】参照。

［銜峰］月が山の端に掛かる様をいう。「銜」は口にくわえる。六朝詩では多く鳥や馬の動作として用いる。人の動作の場合は酒杯、涙を銜んだり、哀しみ・怨み・憂いや思いなどを銜んだりする。月を描くのに用いた例は他に見当たらない。梁・簡文帝蕭綱「秋夜」詩では「緑潭倒雲気、青山銜月規（緑潭に雲気　倒に、青山　月規を銜む）」と、山が月を銜んでおり、この詩とは対照的である。

［似弦］半月のようだ。「弦」は半月。『釈名』釈天に「弦、月半之名也。其形一旁曲、一旁直、若張弓施弦也。（弦、月　半ばなるの名なり。其の形　一旁は曲がり、一旁は直ぐにして、弓を張り弦を施すが若きなり。）」と。

**7復教征戍客　8長怨久連翩**

［征戍客］国境の守備に赴く兵士。「征戍」の語は宋・顔延之「還至梁城作」に「眇黙軌路長、憔悴征戍勤（眇黙として　軌路　長く、憔悴して　征戍に勤む）」と見え、李善注は『春秋左氏伝』昭公三十二年に「勤戍五年。（勤戍すること五年。）」とあるのを引く。また北周・庾信「夜聴搗衣」詩に「誰憐征戍客、今夜在交河（誰か憐れまん　征戍の客の、今夜　交河に在るを）」とある。

［連翩］畳韻。鳥が翼を連ねて飛んでいくように、いつまでも続いて絶えない様。三国魏・曹植「白馬篇」（『文選』巻二十七）に「白馬飾金羈、連翩西北馳（白馬　金羈を飾り、連翩として西北に馳す）」と。

## 陳・後主「関山月」二首其二

【本文及び書き下し】

1戍辺歳月久　辺を戍りて　歳月　久しく
2恒悲望舒耀　恒に望舒の　耀くを悲しむ
3城遥接暈高　城　遥かにして　暈に接して高く
4澗風連影揺　澗に風ありて　影に連なりて揺るる
5寒光帯岫徙　寒光　岫を帯びて徙り
6冷色含山峭　冷色　山を含みて峭し
7看時使人憶　看る時　人をして憶ひ
8為似嬌娥照　嬌娥の照らさるるに似ると為さしむ

【日本語訳】

1国境を守備して既に長い時間が過ぎたが
2いつも月が明るく照らすのを悲しく思う
3砦は故郷から遥か遠く月に届くほど高い所にあり
4谷川を吹く風が月の光に届くほど高く舞い上がる
5月の寒々とした光が峰々を近くに繞らせて西へと移り
6月の姿が山の端に掛かって厳しいほどに冷たい
7こうして月を眺める時にはいつでも
8故郷に残してきた彼女の月に照らされているかのような姿を思い出させるのだ。

【校勘】

○『古詩紀』巻百八・『漢魏六朝百三名家集』「陳後主集」異同無。

【押韻】

「耀」「揺」「峭」「照」、去声三十五笑韻。

【語釈】

**1戍辺歳月久　2恒悲望舒耀**

［戍辺］国境を守備する。六朝詩では他の用例は見当たらない。『史記』匈奴列伝に「諸侯畔秦、中国擾乱、諸秦所徙適戍辺者皆複去。（諸侯　秦に畔き、中国　擾乱するや、諸秦の徙りて辺を適戍する所の者　皆な復り去る。）」とある。「辺戍」の語は宋・鮑照「擬行路難」十八首其十二に「推移代謝紛交転、我君辺戍独稽沈（推移　代謝　紛として交ごも転じ、我が君　辺戍して　独り稽まり沈む）」と。

［歳月］時間。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其一に「思君令人老、歳月忽已晩（君を思へば　人をして老いしむ、歳月　忽ち已に晩る）」と。晋・無名氏「子夜四時歌・春歌」二十首其十三に「敢辞歳月久、但使逢春陽（敢へて歳月の久しきを辞せんや、但だ春陽に逢はしめん）」と。

［恒悲］いつもずっと悲しい。宋・江夏王劉義恭「遊子移」に「常歎楽日晏、恒悲歓不早（常に楽しみの日びに晏きを歎き、恒に歓びの早からざるを悲しむ）」と。

［望舒］神話で月が乗る車の御者。転じて月を意味する。『楚辞』離騒に「前望舒使先駆兮、後飛廉使奔属（望舒を前にして先駆せしめ、飛廉を後にして奔属せしむ）」とあり、王逸注に「望舒、月御也。」とある。晋・陸機「贈尚書郎顧彦先」（『文選』巻二十四）二首其一に「望舒離金虎、屏翳吐重陰（望舒　金虎に　離り、屏翳重陰を吐く）」と。

**3 城遥接暈高　4 澗風連影揺**

［城遥］国境の砦が遥か遠くにある。「城」、前詩第2句「迴照関城前」【語釈】参照。

［接暈］月につながるほど接するほど。六朝詩では他の用例は見当たらない。

［澗風］谷川の辺りに風が吹き抜ける。六朝詩では他の用例は見当たらない。宋・謝霊運「悲哉行」（『古詩紀』巻五十七題下注云『陸士衡集』亦載此詩。誤也。陸別有一首」。に「檐上雲結陰、澗下風吹清（檐上　雲は陰を結び、澗下　風は清らかなるを吹く）」と見える。

［連影］「連」、対の「接」と同様につながる、接するの意。「影」、ここも月をいう。「連影」の語は、後の例に陳・祖孫登「詠柳」詩に「抽翠争連影、飛綿乱上空（翠を抽き争ひて影を連ね、綿を飛ばし乱れて空に上る）」と見える。

［揺］のぼっていく。漢・班固「西都賦」（『文選』巻一）に「遂乃風挙雲揺、浮遊溥覧。（遂に乃ち風のごとく挙がり雲のごとく揺り、浮遊して溥く覧る。）」と。「揺」字、『広韻』下平四宵韻に「動也、作也。」とあり、去声三十五笑韻にも「揺、揺動。又音遥。」とある。ここは笑韻で押韻する。

**5 寒光帯岫徙　6 冷色含山峭**

［寒光］月の清冽な光。鮑照「代白紵舞歌詞」四首其三に「寒光蕭条候虫急、荊王流歎楚妃泣（寒光　蕭条として　候虫　急に、荊王　流歎して　楚妃　泣く）」と。

［帯岫］すぐ側に山々をめぐらせる。「岫」は去声、連なった山々。斉・謝朓「郡内高斎閑坐答呂法曹」詩（『文選』巻二十六）に「窓中列遠岫、庭際俯喬林（窓中遠岫を列ね、庭際　喬林を俯す）」と。

［冷色］六朝詩には他の用例は見当たらない。「寒光」と同じような意味で用いられていると解釈した。

［含山］前詩第6句「銜峰」と同じように月が山の端に掛かる様。梁・簡文帝蕭綱「応令」詩に「遠煙生兮含山勢、風散花兮伝馨香（遠煙　生じて　山勢を含み、風　花を散らして　馨香を伝ふ）」と。

［峭］けわしい。きびしい。ここは対句から月光の冷たさについて言うと解した。

**7 看時使人憶　8 為似嬌娥照**

［使人憶］思い出させる。梁・徐悱「対房前桃樹詠佳期贈内」詩（『玉台』巻六）に「更使増心憶、弥令想狭邪（更に心憶を増さしめ、弥いよ狭邪を想はしむ）」と。

［嬌娥］美しい女性をいう。陳・徐陵「『玉台新詠』序」に「亦有潁川・新市、河間・観津、本号嬌娥、曾名巧笑。（亦た潁川・新市、河間・観津に、本と嬌娥と号し、曾て巧笑と名づくる有り。）」と見える。ここは故郷に残してきた恋人を指すと解した。



**陳・陸瓊「関山月」**

【本文及び書き下し】

1 辺城与明月　辺城と明月と
2 俱在関山頭　俱に関山の頭に在り
3 焚烽望別墨　烽を焚きて別墨を望み
4 撃斗宿危楼　斗を撃ちて危楼に宿す
5 団団婕妤扇　団団たり　婕妤の扇
6 纖纖秦女鉤　纖纖たり　秦女の鉤
7 郷園誰共此　郷園　誰か此れを共にせん
8 愁人屢益愁　愁人　屢しば愁ひを益す

【日本語訳】

1 国境の砦と明月と
2 いずれも関山の辺りにある
3 烽火を燃やして砦の外壁を眺め
4 銅鑼を打ち鳴らして高い物見櫓に宿営する
5 班婕妤の扇のように丸い満月
6 秦羅敷の籠の柄のように細い三日月
7 故郷では誰がこの月の満ち欠けを眺めていてくれるだろう
8 愁いに囚われた人はこの月のために何度も何度も愁いが深まるのだ

【校勘】

○『文苑英華』巻百九十八・『古詩紀』巻百十一異同無。

【押韻】

「頭」「楼」「鉤」、下平十九侯韻。「愁」、下平十八尤韻。尤・侯同用。

【作者】

五三七～五八六。字は伯玉、呉郡呉（江蘇省蘇州市）の人。父は梁代の詩人、雲公。陳武帝の永定（五五七～五五九）年間に州の秀才に挙げられ、後に殿中郎、太子庶士、通事舎人、黄門侍郎などを歴任し、後主が即位すると至徳元（五八三）年に度支尚書に除せられ、官は吏部尚書に至った。集二十巻があったが散佚し、現存する詩は六首。文は三篇。

【語釈】

**1 辺城与明月　2 俱在関山頭**

［辺城］国境の砦。曹植「白馬篇」（『文選』巻二十七）に「辺城多警急、胡虜数遷移（辺城　警急多く、胡虜数しば遷移す）」とあり、李善注は漢・楊雄「長楊賦」に「永無辺城之災。（永　辺城の災ひ無し。）」（「無」、『文選』巻九作「亡」。）

［俱在］いずれも～にある。宋・謝霊運「田南樹園激流植援」詩（『文選』巻三十）に「樵隠俱在山、由来事不同（樵・隠　俱に山に在るも、由来　事　同じからず）」

と。

**3 焚烽望別墨　4 擊斗宿危楼**

［焚烽］烽火を燃やす。六朝詩には他の用例は見当たらない。『後漢書』光武帝紀下に「築亭候、修烽燧。（亭候を築き、烽燧を修めしむ。）」とあり、李賢注は『漢書音義』を引いて「辺方備警急、作高土台、台上作桔皐、桔皐頭有兜零、以薪草置其中、常低之、有寇即燃火挙之、以相告、曰烽。又多積薪、寇至即燔之、望其煙、曰燧。昼則燔燧、夜乃挙烽。（辺方　警急に備へ、高土台を作り、台上に桔皐を作り、桔皐の頭に兜零有りて、薪草を以て其の中に置き、常には之れを低くし、寇有れば即ち火を燃やして之れを挙げて、以て相ひ告ぐるを、烽と曰ふ。又た多く薪を積み、寇　至れば即ち之れを燔き、其の煙を望むを、燧と曰ふ。昼は則ち燧を燔き、夜は乃ち烽を挙ぐ。）」という。

［別墨］砦の外壁。六朝詩には他の用例は見当たらない。「墨」は土を盛り重ねた小さな城壁。

［擊斗］夜警の銅鑼を打ち鳴らす。六朝詩では他の用例は見当たらない。「斗」は「刁斗」。柄の付いた銅製の鍋。昼間は調理に用い、夜は打ち鳴らして夜回りに用いた。『史記』李将軍列伝に「不擊刁斗以自衛。（刁斗を擊ちて以て自ら衛らず。）」とあり、『集解』は「孟康曰、『以銅作鐎器、受一斗、昼炊飯食、夜擊持行、名曰刁斗』。（孟康　曰く、『銅を以て鐎器を作り、一斗を受け、昼は炊飯して食らひ、夜は擊ちて持行し、名づけて刁斗と曰ふ』。）」とする。

［危楼］高い物見台。「危」は高く聳えるの意。「楼」はものみやぐら。梁・徐悱「古意酬到長史溉登琅邪城」詩（『文選』巻二十二）に「脩篁壮下属、危楼峻上干（脩篁壮んにして下に属き、危楼　峻しくして上に干す）」とあるが、こちらは聳え立つ楼閣。

**5 団団婕妤扇　6 纖纖秦女鉤**

［団団］丸い様。漢・班婕妤「怨歌行」（『文選』巻二十七。『玉台』巻一作「怨詩」）に「裁為合歓扇、団団似明月（裁ちて合歓の扇と為せば、団団として明月に似る）」とある。

［婕妤扇］班婕妤が「怨歌行」で描いた扇。ここは満月をいう。「婕妤」は女官名。特に漢の成帝（在位前三十二～前七）の時の班婕妤を指す。帝の寵愛を趙飛燕姉妹に奪われてからは太后に仕えた。

［纖纖］女性の手の柔らかな様。「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其二に「娥娥紅粉妝、纖纖出素手（娥娥たる紅粉の妝ひ、纖纖として素手を出す）」とある。また三日月の細い様。宋・鮑照「翫月城西門解中」詩（『文選』巻三十。『玉台』巻四作「翫月城西城」。）に「始見西南楼、纖纖如玉鉤（始めて西南の楼に見れしとき、纖纖として玉鉤の如し）」とある。

［秦女鉤］美しい娘、秦羅敷が桂の枝で籠の柄を作った。



漢・無名氏「陌上桑」（『楽府詩集』巻二十八。『宋書』楽志作「艶歌羅敷行」。『玉台』巻一作「日出東南隅行」。）に「日出東南隅、照我秦氏楼。秦氏有好女、自名為羅敷。羅敷善蚕桑、採桑城南隅。青糸為籠係、桂枝為籠鉤。（日は東南の隅に出で、我が秦氏の楼を照らす。秦氏に好女有り、自ら名づけて羅敷と為す。羅敷　蚕桑を善くし、桑を採る　城南の隅。青糸もて籠係と為し、桂枝もて籠鉤と為す。）」とある。ここは月にあるというモクセイの木からの連想で三日月をいう。また、北周・王褒「古曲」に「陳王金被馬、秦女桂為鉤（陳王は金もて馬を被ひ、秦女は桂もて鉤と為す）」と。

**7 郷園誰共此　8 愁人屢益愁**

［郷園］故郷。梁・何遜「春暮喜晴酬袁戸曹苦雨」詩に「郷園不可見、江水独自清（郷園　見るべからず、江水　独り自ら清し）」と。

［誰共此］わたしと同じように月を見ている者はいないだろう。「此」は月を指す。

［愁人］心に愁いを抱いた人。晋・傅玄「雑詩」（『文選』巻二十九）に「志士惜日短、愁人知夜長（志士は日の短きを惜しみ、愁人は夜の長きを知る）」と。

［益愁］ものさびしさが多くなる。鮑照「擬行路難」十八首其九に「還君金釵玳瑁簪、不忍見此益愁思（君に還さん　金釵・玳瑁の簪、忍びず　此れを見て愁思を益すに）」（「金」、『玉台』巻九作「玉」。「玳」作「瑇」。「愁」作「悲」。）と。

※本稿は平成二十九年度科学研究費基盤研究（c）「言語実験の場としての六朝楽府に関する研究」（課題番号二六三七〇四一〇）の助成を受けたものである。